

河村龍興さんに就いて一言

石井 鶴三

河村さんは、美校の彫刻科で私より二三年あとのクラスだったが、その頃からの長いおつきあいだったけれど、あまり近々と往来はしなかった。趣味がひろく、いろいろな性格の人だったから、仕事も多方面にわたっていたことはもとよりで、その画業も決して彫刻家の余技といった程度のもではなかった。このたび、その画業の遺作展が開かれると承わり、必ずずやおもしろい絵が見られることと思う。

昨秋、信州追分のお家にお訪ねして、半日楽しく過ごしたが、それが最後のおわかれになったのは、忘れ難い悲しみであるが、その時々の写生帖を示されて、このあたりに見られるきのこは、およそ百何十種であるが、そのうち毒のあるのはわずかであるといわれた。毒の有無を見わけるのは、いちいち自身ためしてみること、試みに少し味わってみる程度なら、毒にあたっても大したことはなく、それでわかるということであつた。そしてそのきのこを写生し、かたちを写すばかりでなく着色し、絵のかたちちにその特徴、あらわれる時期、毒の有無などが書き入れてあつた。それでは標本図のように想像されるかも知れないが、決してそうではなく、絵になつてゐるところに、河村さんの芸術性的一端がうかがわれるというものである。

自由さとうまさ

萩原井泉水

当今好い俳画をかく人が殆どない。俳画は俳句のもつ単純化のコツだけでも、画となれば、脱筆妙を重しとする傾きがある。昔の俳人にして、本当の俳画をかいたものは、蕪村と涼蓑と土郎とではないかと思う。龍興君は画人ではないところに、画人の刻みえない自由さがあり、さりといふ所以であるう。

龍興君がなくなつて、早くも一年あまりになる。今にして思うに、俳画というものは「人」士的な風格をもつた人は、今後もう出ないであらう。こんなドライな世の中になつて猶更、故龍興君の作が貴いものに感じられるのである。